

プロローグ ユーラルーム

……もの淋しい十月

十歳のころ『アッシシャー家の崩壊』(一八三九年発表のポオの短編小説)を読み、正気を失うほど怖い思いをして以来、エドガー・アラン・ポオの熱烈なファンになった。そういうわけで、フィラデルフィア大学大学院の履修便覧でポオの生涯と作品をテーマにした講座の告知を見つけたとき、私は意気揚々とそれをジニー・パット・ソーンダイクに読んで聞かせた。ジニー・パットは学部生時代のルームメイトで、修士号を取るために私とともに大学へ戻ってきたのだった。

「エドガー・アラン・ポオ。セミナー形式。教室での討論と学生自身によるリサーチを通し、ポオの生涯と作品を詳しく考察する。土曜日、午前九時から十一時。ルアク教授」

告知文の最後の一語を読み上げた。パトリック・ルアク教授といえは、アメリカ文学への造詣の深さに加え、二つの点でこの大学では有名だった。痛烈な皮肉の才能と、女子学生嫌いである。噂によれば、前者を実践することで後者を紛らせているらしい。

ジニー・パットは、「やっぱりね」という顔をした。「その講座を取りたがると思ってたわ、ピーター。だから、バートン先生に訊いてみたの」バートン先生は私たちが学部生のときの聴罪司祭で、私が犯罪小説——私はミステリ作家だ——で、ジニー・パットがそれほど血を見ることのない文学で身を立っているのは、バートン先生の後押しのおかげでもあった。「バートン先生が言うには、ルアク

教授って、顔見知りになってしまえば、すつごく親切で愛嬌のある人なんだって」

大学院の履修登録室で、長テール向かいに座っていた女子学生のヘレン・ブラックがこちらを見て小ばかにしたように笑った。小ばかにしたように笑ったにちがいないが、高熱でこちこちに焼き固められたみたいな顔にしか見えなかった。

「身内には親切で愛嬌があるかもしれないけど」と、ヘレンは言った。「でも、わたしたちには、ありえないわね。パイパーさん、悪いこと言わないから、その講座はやめたほうがよくてよ」

ジニー・パットと私にはつこり微笑んだ。そんなことを言われたときは、これが一番の安全策だ。そして、私たち二人は登録カードのポオ講座にさつさと印をつけた。あまのじゃく以外の何ものでもなかった。

ヘレン・ブラックを「女子学生」と呼ぶのは形の上だけで、たとえそうだとしても、想像力をかなり柔軟にする必要があった。だが、ジニー・パットが言うように、いつかは私たちだって四十歳になるのだし、そうなったときは笑っていられないはずだ。私たちは学部生ときからヘレンを知っていた。そのときから——これも、ジニー・パットに言わせれば——じゃが芋のような体形だった。図書館のアメリカ文学室で働くヘレンは、本とともにゴシップも用意してくれた。本は大学が用意したが、ゴシップのほうは、さまざまな情報源からヘレンが手際良く集めてきたものだった。その手際の良さときたら、まるで金探掘者が選鉱鍋で砂金を選別するみたいだった。ヘレンの趣味はこまごました情報の収集で、そのほとんどが穏やかならぬ、もしくは好ましからぬ他人の人間性に関する情報だった。だが、他の収集家と違うのは苦勞の成果を独り占めしないことで、最悪の結果を招く方向へそれを伝えては、成り行きを静観した。

大学の女子寮——よくある下宿よりずっと居心地がいい——に入るには、少なくとも一つ、講座に登録しなければならぬ。ヘレンはこれを、ジニー・パットと私が入学する前から続けていた。そういうわけで、ヘレンが履修登録室にいたとしても驚かなかったが、驚いたのは、ヘレンもまたポオのセミナーに登録したことだった。「やめておけ」とあんなに言っていたのはヘレン本人だったではないか。

「きつと、あの講座しか」と、懐かしい場所がいまも残っているか見てみようと言った。私は「残ってなかったのよ」

だが、そうではなかった。一日ほど経ち、この手のことに鼻の利くジニー・パットが真相を突き止めた、教えてくれた。

「ヘレン・ブラックは前回も同じ講座を取ったんだけど、ルアクはヘレンを落第にしたんだって。それで、大学の図書館員が落第したままなのは格好悪いから、またあの講座を取るんだって」

そういうわけなのね、とヘレンがルアク教授を毛嫌いしていたことも含め、私は内心で納得した。だが、「そういうわけなのね」と思うことがこの先どれだけあるかは、このときは知る由もなかった。

ふたを開けてみれば、ルアク教授は吠えたり噛みついたりするとはいつても、噂ほどひどいわけではなかった。小柄で銀縁の眼鏡をかけ、短く刈りこまれた白髪はまるで逆立っているように見えていた。私はすぐにルアク教授を好きになった。アイルランド人はユーモアのセンスに長けてはいるが自分のこととなると別だと書いた私のレポートに罰点をつけたとしても——ほら、私がレポートに書いたとおりだ（ルアク (R. A. C.) はアイルランド系の名手)——、いまもルアク教授のことは好きだ。

セミナーは少人数制なので、学生は七人だけ、そのうちの三人がヘレンとジニー・パットと私だった。四人目の女性はミス・カツツといて、何年か前に小さな教員養成系の大学を卒業し、今回は専門知識を身につけたいという純粹な目的から、この大学で文学修士を取ろうと励んでいた。フーストネームもあるはずだが、誰も知らなかった。私たちは彼女をカツツイと呼んだ。かわいそうなほど痩せこけ、声はといえば、子どものころ無理に高い声を絞り出していたのだろう、それきり元に戻っていなかった。キャンパスで彼女が向こうから歩いてくるのが見えたら、思わず近くの脇道に入ってしまった、そのあと決まって自分を恥じる。カツツイは、みんなにそんな思いをさせる女性だった。ちゃんと読みやすい文章になっているだろうか。カツツイのこととなると、私はいまひとつ調子が出なくなってしまう。これには理由がある。ある日曜日の昼食のとき、私があんなに自分本位の嫌な女でなく、ジャド・フィリップスさんのところへポオのコレクションと一緒に見に行こうという彼女の誘いを断っていなかったら、違っていたかもしれない。あのとときクライド・ウツドリングに言われたこと——もし私が行っていたとしても、事件は食い止められなかっただろう。それどころか、『モルグ街の殺人』(一八四一年発表のポオの短編小説)が半分だけじゃなくて完全に再現されたかもしれない——を思い出したら良心の呵責を和らげようとしているのだが、あまり効果はない。二人一緒だったら無事だったはずだ。一人だけだったから——詳しいことは順を追って話していくつもりだ。

あとの三人は男子学生——ジェームズ・アロイシウス・カーニー(ジェイミー)とアーチャー・シユルツとクライド・ウツドリング——だった。

ジェイミーは音楽家で、ダンスバンドを率いていた。ポピュラー音楽をどう考えるかによって、音楽家と呼んでいいかどうか意見は分かれるかもしれないが、男性美という点では見るべきものはあま

りなかった。背は低く、真面目な顔つきは性格とは正反対だ。それでも、彼には際立った特徴が二つあった。一つ目は、自ら招いた窮地へいとも簡単に陥り、いとも簡単にそこから脱するという恵まれた天分。二つ目は、他人を意のままに動かす能力だった。

ジェイミーには人生をかけて愛するものが三つあった。音楽とジニー・パット、そして——信じられないかもしれないが——ルアク教授だ。この三つ目を愛するようになったのは大学二年のときだ。ジェイミーは長い長い学期末レポートの半分のあたりに「先生がここまで読まないことに二十五セント賭ける」と書いた。レポートが戻ってくると、表紙いっぱい一言、「二十五セント貸し」と書かれていた。将来が約束されたわけでもないこの出来事をきっかけに、二人の稀有な師弟愛は深まっていった。ルアク教授はジェイミーの能力を一分間褒めたかと思うと、次の五分間は怠け者と叱咤して愛情を表現し、ジェイミーのほうはまったくの無関心を装って愛情を表現したが、ルアク教授に求められれば喜んでカレッジ・ホールに這っている鳶をよじ登って古ぼけた時計塔の上で逆立ちすることは、みんな知っていた。少しのあいだスイング・ミュージックから離れる決心をして、ポオの数多くの短編詩にまとまった曲をつける作業を始めたのは、ルアク教授の勧めに応えたからだだった。中途半端なことの嫌いなジェイミーは、自分の取り組みを進めるにあたり内面的な部分をもっと深く理解しようとして、このセミナーを受講しているのだった。

ジェイミーの話はこのくらいにして、次はアーチャー・シュルツに移ろう。本業は彫版師、副業はヘレン・ブラックの永遠の男友だちだった（大学院で勉強する気になったのは、おそらく彼女が理由だろう）。髪の毛が多少あるという点を除けば、気味が悪いほどアンディ・ガンブ（新聞に掲載されていた漫画の登場人物の男性。顎が極端に小さい）に似ていた。そういうわけで、アーチャーと話していると漫画の中に入りこんだような奇妙な気

分になり、加えて、二つの特徴に気がつくのだ——一つは、ひっきりなしに咳払いすること。もう一つは、何を話しているのか意味がよくわからないことだった。前者は、本人にもどうしようもなかったのだと思う。ひよっとしたら後者も、どうしようもなかったのかもしれない。だとしても、会話の相手がこうした特徴に気づいたのを見て、「君の心は汚れているね」という顔をしなくてもいいのだ。最後はクライド・ウッドリング。患者への接し方がとりわけ上手で人気者の医者といったタイプだったが、実のところはミス・カツツと同じく学校教師で、やはりミス・カツツと同じく専門知識を深めたいという純粹な目的で文学修士号取得の準備を進めていた。この大学の出身でなかったため、彼をよく知る人はいなかった。ところが、彼がポオの直筆の原稿を発見するという出来事があり、文字どおり一夜にして、無名の存在から有名人となった。

新学期が始まって間もないころだった。「編集者時代のポオ」が研究テーマだったクライドは、資料収集のため、ポオが主として編集に携わっていたそれぞれの期間の『グレアムズ・マガジン』と『ジエントルマンズ・マガジン』をどっさりどこから持ってきた。これらの雑誌自体はとくに入手困難だったり貴重だったりするわけではない。そういうわけで、『グレアムズ・マガジン』の黄ばんだページのあいだからこんなお宝を発見したということは、昼に大学前の屋台で牡蠣のシチューを注文したら真珠が入っていたというようなものだった。それは年を経て色褪せた一枚の紙で、黒から茶へと時間とともに変色したインクでポオの詩『ユーラルーム』が直筆で書き記されていた。

クライド自身はそれが何なのか最初はわからずにいた。しかし、ルアック教授には一目でわかった。もちろん第一稿ではなく、ポオがミス・スーザン・イングラムのために書き写し、現在はモーガン図書館に所蔵されている原稿と同様、のちに書き写されたものにすぎなかったが、それでも、花びらが

普通の倍くらいに波打ったベチュニアの種たねのように、同じ重さの金よりも価値があった。ルアク教授はクライドに相談せずに、この手稿を大学の理事会に持ち込んだ。そうして理事会で話し合いがもたれ、最終的に、大学はクライド・ウッドリングからそれを一万ドルで買い取るようになった。その詩を最初に掲載した『アメリカン・レビュー』誌が作者のポオに支払ったのは、おそらく十ドルほどだったにちがいない。

大学がアメリカ史に残る貴重な文献を入手したのを祝い、図書館のアメリカ文学室で文学のテイラー・パーティーが催された。新しくやってきた宝物は展示用のガラスケースの中で孤高の輝きを放ち、遠路はるばる訪れたポオの熱狂的ファンは羨んだり感嘆したりし、そこまで芸術を解しない人はそれを見て、墓場に埋まっていたも同然の詩にそんな大金を払うとは正気の沙汰でないと思ったのだった。ルアク教授は小さな体で、まるでその詩が自身の作のように自慢してまわり、一方でクライド・ウッドリングは時のヒーローとなつて、自己満足に浸っていた。ところがそれも、『ユーラルーム』をあらんなにあつさり売つちやうなんて馬鹿だわね、とたまたま通りかかったヘレン・ブラックがまったく悪気なく発した一言で終わってしまった。というのは、知っていれば喜んで一万五千ドル出したのに、とチェスナット・ヒルに住む大富豪の収集家ジャッド・フィリップスがオストランダー教授（アメリカ文学部でルアク教授の一番の研究仲間ということになっているが、実はライバル）に言っているのをヘレンが聞いてしまったのだ。

そう言われたクライドは、飲んでいたお茶がいきなり渋くなったような顔をした。それでも次の瞬間には、引きつってはいたがどうか笑顔をつくり、さらには両肩を軽くすくめる仕草まで見せた。

「まあ、でも」達観したようにクライドは言った。「ポオよりはたくさんもらえたからね」